

# ぽぼりけーしょん

事務局 北海道医療ソーシャルワーカー協会  
札幌市中央区南4条西10丁目  
北海道歯病センター内  
<http://www.hmsw.info/>

## 『札幌市東区がめざす「地域包括ケアシステム」とMSWの役割について』

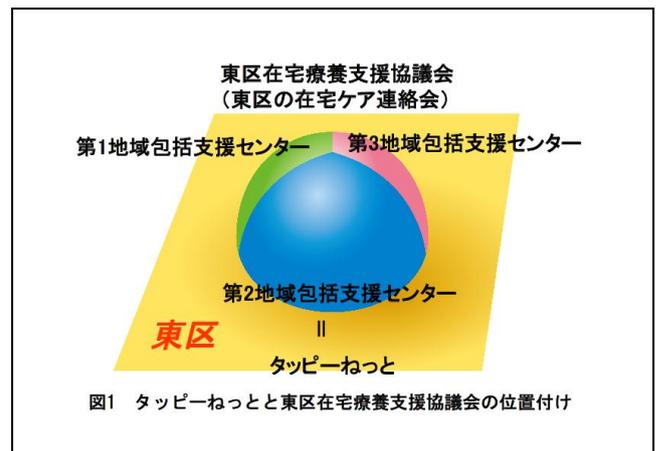
札幌市東区東部地区在宅医療連携協議会 タッピーねっと  
副代表 三木 敏嗣  
(みきファミリークリニック 院長)



「地域包括ケアシステム」という言葉は、現在、日本の医療、介護、福祉関係者の間には、次代のヘルスケアシステムを示す代名詞として広く認知されています。無縁社会、高齢化社会、核家族化、孤立死など多くの問題を抱える社会の変化や、医療の専門分化、介護保険の導入により他職種が柔軟に支援に関わらなければこの多様な問題を解決できない時代となってきています。現在のこのような問題を解決しようとする社会理論が「地域包括ケアシステム」となります。しかし、「地域包括ケア」という言葉が生まれる以前より、在宅診療にあたる医師や、訪問看護師、行政の保健師などの諸先輩の方々が実践されていたことが「地域包括ケア」そのものであり、それを礎に地域のすべての職種に「信頼できる顔のみえる関係」が広がっていくことが、このシステムの構築に繋がっていくことだと考えています。

札幌市においては、介護保険が導入される以前の1997年に、「人と人のつながり」を目的に西区在宅ケア連絡会は発足し、その後、札幌市10区と江別市に広がり、それぞれ活動しています。東区においても、諸先輩に築いていただいた東区在宅療養支援協議会(東区の在宅ケア連絡会)が、月1回のペースで研修や事例検討を行い、また2012年、厚労省のモデル事業である在宅医療連携拠点事業を東苗穂病院が受託し、札幌市東区東部地区

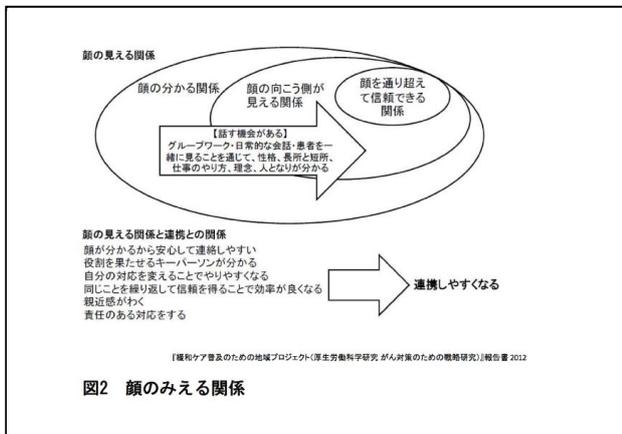
在宅医療連携協議会(以下:「タッピーねっと」)が発足しました。東区には、3ヶ所に地域包括支援センターがありますが、「タッピーねっと」は、東苗穂病院の存在する東区第2地域包括支援センターの地域において、拠点事業を展開することとしています。(図1)。「タッピーねっと」副代



表である兼重先生(東苗穂たんぽぽクリニック院長)は、「モデル事業なので、果敢にチャレンジすることが大切ではないか」と思います。失敗も成功も先に繋がる価値のあることだと思うので皆さんの専門性・知識を集結して、困難を共有し、ハードとソフト・人と人のつながり大切にして新しいシステムを構築していきましょう」と述べられています。「人と人のつながり」、「信頼できる顔のみえる関係」

## (2)医療福祉情報

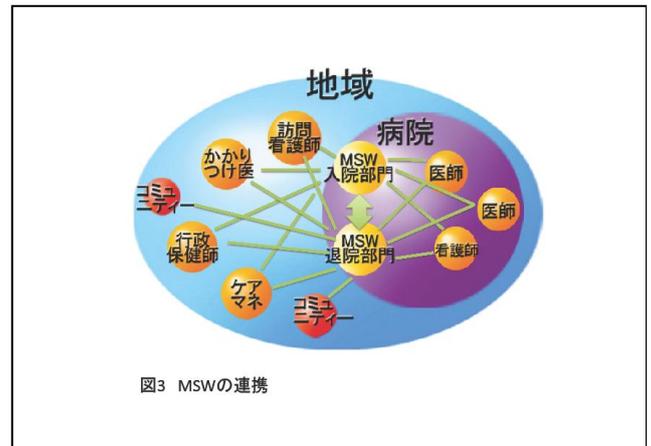
(図 2)を大切に「地域包括ケアシステム」構築をめざし、「タッピーねっと」は、先進的な取り組みを、そして東区在宅療養支援協議会は、東区全体に拡げていけるよう同じ目的に向かって協働し補完関係をもった活動をしています。



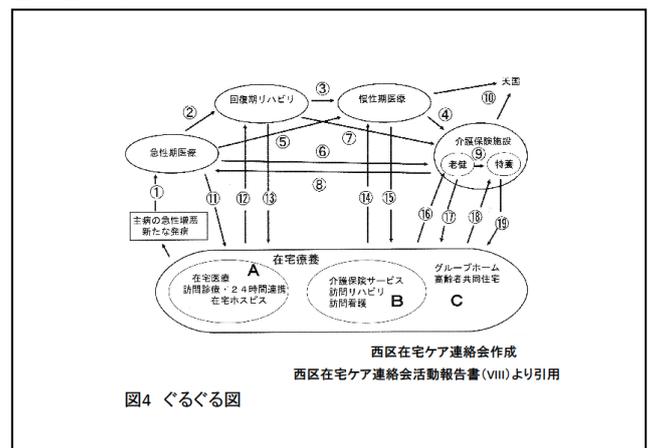
では、連携(collaboration)とは、どのようなことでしょうか？ 連携とは、合作、共同作業、利的協力を指す言葉、とても耳触りのいい言葉です。しかし「利的協力」という意味合いから、あるサービスについて提携しあっているもの同士が、相互に利益を得、円満な関係 すなわち「win-win の関係」を構築していかなければ、良好な連携は成り立ちません。ときどき「連携」という言葉のもとに、患者さんを丸投げしてしまう方々がいらっしゃいますが、これでは「win-win の関係」を築けず、単なる「顔が分かる関係」であり連携とは言えません。「patient-oriented medicine」という言葉の如く、患者さんを中心に考え、お互いに配慮し合い、患者さんを follow し合う「win(患者さん)-win-win の関係」を築いていくことが大切です。このような関係では、お互いに、患者さんへの気持ちを共有することができ、さらなる信頼関係が築かれてきます。それを繰り返していくことにより「信頼のある顔のみえる関係」(図 2)を築け、よりスムーズで、互いに責任のある連携ができます。

MSW(Medical Social Worker)とは、『保健医療分野(主に病院)において『疾病を有する患者等が、地域や家庭において自立した生活を送ることができるように、社会福祉の立場から、患者や家族の抱える心理的・社会的な問題の解決・調整を援助し、社会復帰の促進を図る』専門職とされています。多くの勤務医は異動があり、多忙であるため、在宅療養に関わる医療従事者(かかりつけ医、訪問看護師、ケアマネ、地域包括支援センター、行政保健師など)の間には、「信頼のある顔のみえる関係」を築いていく事はとても難しいことです。在宅療養に関わる医療従事者の視点から見ると、MSW は、退院時には、入院中の患者さんの情報提供や、退院時カンファレンスを調整など、

患者さんの入退院時に病院各医師と在宅療養に関わる医療従事者との情報共有を繋ぐ重要で中心的な役割を担っています(図 3)。西区在宅ケア連絡会の作成した連



携図である「ぐるぐる図」(図 4)の如く、急性期医療、回復期リハビリ、慢性期医療、介護保険施設と在宅医療との間の情報共有には、それぞれに各病院、施設の MSW の方々との連携に加え、患者さんに適した療養の場を考慮できる「信頼できる顔のみえる関係」が必要となります。また入院部門と退院部門の MSW に部門が分かれている病院があります。この両部門の MSW 間における情報共有はとても重要で、情報共有がはかれている病院は、在宅療養に関わる医療従事者ともスムーズで効率的な連携がとることができます(図 3)。さらに、これら MSW の方達も、もっと病院外にでいただき、在宅ケア連絡会などの場を活用するなどして、在宅療養に関わる医療従事者と「信頼のある顔のみえる関係」を構築していただければと思います。



最後に、現在の高齢化社会など多様な問題に対し、今ある社会資源や医療-介護の連携だけでは、解決できない時代となってきています。今後は、病院 MSW、在宅医療介護従事者が地域のコミュニティとも連携(図 3)し、患者さんが地域や家庭において自立した生活を送ることを支援できる「地域包括ケアシステム」の構築を目指していきたいと考えています。

# “「地域で暮らす方々を支える 医療ソーシャルワーカーの役割」”

医療法人社団豊生会 東苗穂病院  
在宅医療連携センター  
センター長 葛西 千鶴子(看護師)



2011年より、厚生労働省主導による地域包括ケアシステム実現に向けた「在宅医療連携拠点事業」が全国で展開されています。

この事業は、我が国の高齢者の増加、特に日本の高度経済成長を支えてきた『団塊の世代』(1947～49年に生まれた人々)の方々が後期高齢者となる2025年を見据えて計画されています。この後期高齢者の増加に比例し、独居高齢者、高齢者夫婦世帯が急速に増えていきます。戦前の日本では、高齢者は長年住みなれた自宅で子ども、孫と一緒に生活し、高齢者の介護は、子育て同様に家族内で行われてきました。しかし、団塊世代は仕事を求めて故郷を離れ都市部に流入、そこで結婚し家を建てて、小さな核家族を形成してきた世代です。同様に、その子供も就職や結婚で家を離れるため、子育てが終わると夫婦のみの世帯となり、配偶者が亡くなると独居高齢者世帯になります。変化していく価値観の多様化に伴い、病気を持ちつつも可能な限り自分らしく過ごす「生活の質」を重視する医療が求められています。前述した社会背景に対応するために、「在宅医療連携拠点事業」は、在宅医療を提供する機関等を連携拠点として、多種協働による在宅医療の支援体制を構築し、医療と介護が連携した地域における包括的かつ継続的な在宅医療の提供を目的として実施されています。

当院では、2012年度より全国105か所の中の1拠点(北海道は当院含め4拠点)として取り組んでおります。その中で、私はケアマネジャーの資格を持つ看護師として、多職種協働による在宅医療支援体制構築を目的とした協議会の事務局として活動しています。

当院の所在地である札幌市東区では、平成11年より多職種連携を図る目的で東区在宅療養支援協議会が活動しており、在宅療養支援への意識が浸透している状況と言えます。

拠点事業を展開するにあたって、札幌市東区在宅療養支援協議会の基盤を活用させて頂き、東区東部地区に地域を設定し、札幌市東区第2地域包括支援センターと連携しながら医療と介護の協働を図るため、東区東部地区在宅医療連携協議会(通称「タッピーねっと」)を設立

いたしました。地域をせばめる事で、より深い関係づくりが出来るよう、顔の見える場を設定し、人と人とのつながりが出来る事で支援体制が強固となるよう、また連携強化できるシステムづくりを目指しています。

現在まで多職種が一堂に会する合同会議を3回実施し、100名以上のさまざまな職種の方に参加していただいています。地域病院の医療ソーシャルワーカーの方も多数参加され、多職種協働への取り組みに参加しています。

この協議会の中で、地域の現状と課題を把握するために実施したアンケートの中で、医療と介護の連携は必要かとの問いに、全員が必要との返答を得ています。介護職側からの連携を取りづらい理由として多くを占めていたのは、医療職側の垣根が高いと感じているということでした。また、お互いがお互いの仕事を理解していないために起こっている不協和音もありました。

相談ケースを通してみると、当地域でも独居高齢者、高齢者夫婦世帯が増えている現状を感じます。今は元気に過ごされている方、また、在宅医療や介護が必要な方でも地域で生活されている方の多くは、在宅医療や介護に関する知識は少なく、相談窓口自体も知らない場合が多い現状を感じます。このような問題を解決していくためには、医療ソーシャルワーカーの存在が重要と考えます。入院医療・在宅医療を問わず、患者の療養生活の支援に不可欠の役割を持っていると思います。

チーム医療が医療機関内で完結していると考えられる入院医療に比べ、在宅医療においては、医療専門職のみならず介護・福祉の専門職からなる広範なチームケアを必要とします。また患者・家族の地域生活の支援には、保健医療や社会福祉のみならず、教育・雇用・交通・レクリエーション、さらには近隣・地域を含め、フォーマル及びインフォーマルなソーシャル・サポート・ネットワークを必要とすると思います。そういう意味で、患者の療養生活上の総合相談窓口であるとともに、保健医療と社会福祉、医療機関と地域、フォーマルとインフォーマルとの連携・協働のコーディネーターとしての医療ソーシャルワーカーとしての専門性を発揮していただく事を期待しています。

## “「多職種と共に地域で ～ 医療ソーシャルワークの展開 ～」”



社会医療法人母恋 天使病院  
MSW 榎野 裕也

私の所属する中央C支部(東区、白石区)ではもっと地域に根差した活動がしたいという想いから2008年度より医療福祉活動部を設置し、住民へのエンパワメント、医療福祉関係団体との交流、地域イベントへの参加を柱に活動を開始しました。入院した時に必要な制度・知識をまとめた「安心入院ガイド」(北海道MSW協会のホームページからダウンロードできます)の発行、札幌市白石区第1地域包括支援センターで開催していた「ウェルフェアカフェ」の共催、年に一回開催される「北海道がんと闘う医療フェスタ」の福祉相談コーナーへの協力と、今も柱となっている活動が初年度から開始されました。

主な活動である「ウェルフェアカフェ」は東区、白石区で多職種交流を目的に毎年各区2回ほど開催しています。初めにその時のトピックスなどを勉強し、その後交流会でグループの中で自由に話し合っています。問題は同じでも視点が違い、でもクライアントのためという基本理念は同じで、毎回良い刺激を受けています。

東区、白石区という隣り合った地域ですが違いがあります。白石区では地域包括支援センターと各福祉分野との結びつきが強く、分野も様々な参加が当初よりありました。最近では孤立死問題という地域で実際に起こった問題をきっかけに地域の中で同じ問題意識をもって活動ができています。「ウェルフェアカフェ」として様々なところに認識され、お声掛けを頂けることも出てきました。

東区は、1～3地域包括支援センターと共に活動しています。当初は高齢分野が主でしたが他分野との関わりも常に意識して活動を続ける中で、日々の実践の中で障害分野との関わりが増えてきていることが分かり、東区自立支援部会との繋がりを作り、一昨年より共同で活動できるようになりました。

今は顔が見える関係ができるように活動しているところですが、地域に様々な専門職がいることが分かり、交流

を通じて少しずつ地域の問題も見えるようになり、今後は地域のために共に何かできればと次の段階について考えているところです。

また、この活動を続ける中で地域包括ケアの話題が出ることも多くなりました。「ウェルフェアカフェ」は地域包括ケアを目的として行っているわけではありませんが、「ウェルフェアカフェ」で出会った多くの方が、「タッピーねっと」にも参加しており、初めから良好な関係を「ウェルフェアカフェ」を通じて築けたことは良かったと感じる部分です。

「タッピーねっと」については三木先生、葛西さんからお話があると思いますので詳しいことは割愛しますが、地域の中で多職種が協働し、地域の医療福祉が向上できるよう、微力ですがお手伝いしたいと考えています。

地域包括ケアシステムは全ての地域が同じシステムで動くということではなく、各地域の特徴を把握してシステムを作っていく必要があります。その地域の特徴、社会資源など地域の実情を理解し、各々の役割をお互いが知ることがまず重要であり、相互理解の上に、地域の問題を共通認識し、住み慣れた地域で生活できるような体制作りを地域で行うことが必要です。その結果、社会構造の変化や社会保障や公的扶助が変化したとしても対応できる力を持った地域社会になるのではと考えます。

医療機関は地域の中で重要な役割を果たしており、他の専門職からもそう認識されていますが、外からは敷居が高いと思われています。MSWは医療機関の窓口として敷居を下げるのと同時に、地域と医療機関とを結びつける潤滑油としての役割を期待されている職種であると「ウェルフェアカフェ」を通じて感じています。

地域や社会からの期待に応え、多職種との連携を円滑に取れる体制を整え、地域住民が地域で安心して生活できるように医療福祉が貢献できるように今後もMSWとして地域活動を継続していきたいです。